

## 『物語二百番歌合』論--源氏の宮をめぐる歌

著者	江草 弥由起
雑誌名	清心語文
号	8
ページ	27-40
発行年	2006-07
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1560/00000264/">http://id.nii.ac.jp/1560/00000264/</a>

## 『物語二百番歌合』論

## ——源氏の宮をめぐる歌——

『物語二百番歌合』は、藤原定家が物語中の和歌を選歌・結番した、前後二編各一〇〇番からなる歌合を総称したものである。この作品は、『百番歌合』（源氏狭衣百番歌合）及び『後百番歌合』（拾遺百番歌合）の二編から構成されており、両編共に左方に『源氏物語』所収歌を配し、前者は右方に『狭衣物語』所収歌、後者は右方に『夜寝覚』『御津浜松』『参河爾佐介留』『朝倉』『左毛右毛袖奴良須』『心高幾』『取替波也』『露之宿』『末葉露』『海人刈藻』の一〇編の物語所収歌を結番している。藤原良経の命で定家が撰進した。

この論文では、『物語二百番歌合』の前半にあたる『百番歌合』を中心に考察していく。『百番歌合』は左方に源氏物語歌、右方に狭衣物語歌を配してある。『源氏物語』の番として『狭衣物語』をもってきているところに、定家の狭衣物語歌に対する評価の高さが窺われる。

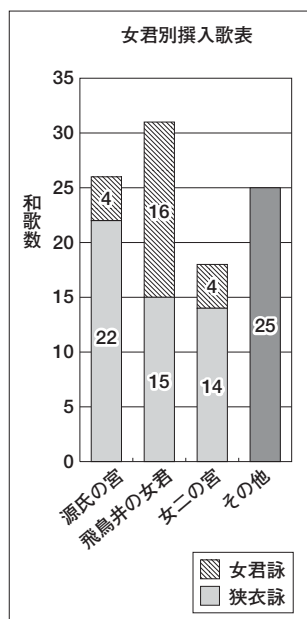
定家は『物語二百番歌合』において、既存の物語歌を結番・配列し

たのみならず、部立を設け、それぞれの歌に詞書を付している。たや

すく出来るものではなからう。定家が『物語二百番歌合』の作成を試みた背景には、定家の物語歌への関心の高さがあったと言えよう。『物語二百番歌合』に撰入された歌を見ていくことで、定家がいかに物語を受容していたかを、窺い知ることができると考えられるのである。

ここでは、『百番歌合』の左方の狭衣物語歌の撰歌傾向について述べ

【資料一】 『物語二百番歌合』撰入歌の傾向



江 草 弥由起

ていく。定家が『物語二百番歌合』において、どのような歌を撰入しているかを見ていくと、『資料二』のような傾向が見えてくる。

『狭衣物語』の和歌は、狭衣と女君との関係の中で詠まれたものがほとんどであるという傾向がある。このことより、狭衣物語所収歌を関連する女君別に分析していくと、物語に出てくる源氏の宮・飛鳥井の女君・女二の宮という、三人の女君に關係する歌が多く撰入されているという傾向が看取された。

また、この三人の女君の関連歌には、『物語二百番歌合』において、それぞれに多く配されている部立が存在している。このことより、定家がそれぞれの女君に関連して詠まれた歌に、それぞれ異なった趣を感じたであろうということが考察される。

今回は三人の女君の中でも、源氏の宮を取り上げていく。

## 二

源氏の宮は物語において、自分からこれといった行動は起こさないし、歌も多くは詠まない。源氏の宮自身の心情を細かく描いているわけでもなく、彼女自身の自己アピールもこれといってない。それにも関わらず、物語を通じて源氏の宮の存在が感じられるのは、何故だろうか。

『狭衣物語』において源氏の宮が作中で詠んだ歌は、独詠歌<sup>注一</sup>三首・不成立贈答歌<sup>注二</sup>無し・贈答歌七首の計一〇首である。それに対

し、狭衣が作中で源氏の宮への思いをめぐらせて詠んだ歌は、独詠歌二四首・不成立贈答歌一首・贈答歌四首の計三九首ある。源氏の宮の詠む独詠歌は、先の章でも述べたが、三首いずれも狭衣を思つて詠んだ歌ではない。それに対し狭衣が源氏の宮に思いをめぐらせて詠む独詠歌は、全て源氏の宮への恋心やその恋の辛さを嘆いたものとなっており、不成立贈答歌も源氏の宮に一方的に恋情を訴えたものとなっている。源氏の宮が狭衣のことを、狭衣のように恋慕しているわけではないことは、源氏の宮詠の独詠歌・不成立贈答歌がないことから容易に想像できるし、事実、物語中で狭衣は源氏の宮から思われることなく終わる。

源氏の宮は歌をほとんど詠まず、詠んだとしてもそれは、心の内を吐露するような歌ではない。源氏の宮は狭衣に思いつづけられているにも関わらず、どんな女君なのかは狭衣からしか語られない。源氏の宮自身の歌や行動の描写が少ないため、源氏の宮が自身の存在を読み手に印象付けることができないのである。そう考えると、源氏の宮の存在というのは、狭衣の恋情の上に成立しているように感じられる。物語中に源氏の宮は実体として現れているが、その実体よりも狭衣の思いの上で表れる実体の無い源氏の宮の方が、イメージとして残る。ただ源氏の宮としてあるよりも、狭衣の思慕の相手としての源氏の宮の方が印象深いということである。定家が『物語二百番歌合』で源氏の宮をめぐる歌を多く恋部立に撰入したわけが、ここにあるのではないかと思われる。

ここで、源氏の宮関連撰入歌が『物語二百番歌合』のどの部立に多く配されているかを見ておこう。

【資料二】「源氏の宮関連撰入歌の部別和歌数表」

	恋部	別部
独詠歌	9	0
不成立贈答	7	0
贈答歌	3	1
	旅部	哀傷部
独詠歌	1	0
不成立贈答	0	0
贈答歌	0	0
	雑部	計
独詠歌	4	14
不成立贈答	0	7
贈答歌	1	5

【資料二】より、二六首の撰入歌の内一九首、つまり撰入歌の七割以上が恋部立に配されていることが分かる。恋部の約半数が、源氏の宮関連歌であるとも言える。またこれは、他の主要女君の女二の宮八首・飛鳥井の女君八首に比べ、際立って多いものである。さらに言えば、一番から四三番まである恋部立の最初と最後に、源氏の宮関連歌が配されている。

【資料三】「源氏の宮をめぐる恋部の歌」

\* 狭衣物語歌は『物語二百番歌合』で右歌にあたるため、歌番号は全て偶数番となっている。また、歌番号を□で囲ってあるものは源

氏の宮詠のもので、それ以外は狭衣詠である。

二 めぐりあはむかぎりだになき別かなそらく月のはてをしらねば  
 (巻四)

一〇 いろいろにかさねてはきじ人しれずおもひそめてしよはのさこ  
 ろも (巻一)

一一 あはれそふ秋の月かげそでならでおほかたにのみながめやはす  
 る (巻四)

一六 よしさらばむかしのあとをたづね見よのみまどふこひのやま  
 かと (巻一)

一八 しのおるをねにたてとやこよひさは秋のしらべのこゑのかぎ  
 りに (巻二)

三二 いかにせむいはぬいろなる花なれば心のうちをしる人もなし  
 (巻一)

三四 わが心しどもどろになりにつけりそでよりほかになみだもるま  
 で (巻一)

三八 こゑたててなかなばかりぞものおもふ身はうつせみにおとりや  
 はする (巻一)

四二 見ること心さわがすかざしかなをだにいまはかけじと思ふ  
 に (巻三)

五四 そよさらにたのむにもあらぬこごささへすゑばのゆきのきえも  
 はてぬに (巻二)

五六 すゑのよもちぎりやはするくれたけのうはばのゆきをなにな

のむらむ（巻二）

五八 おもふことなるともなしにいくかへりうらみわたりぬかものか

はなみ（巻四）

六〇 神やまのしひしばがくれしのべばぞゆふをまかくるかもの水が

き（巻二）

六四 もえわたるわが身ぞふじの山よただゆきにもきえずけふりたち

つつ（巻二）

六六 たにふかみたつをだまきは我なれやおもふ心のくちてやみぬる

（巻三）

七〇 あくがるるわがたましひもかへりなむおもふあたりにむすびと

どめば（巻三）

八二 こひしさもつらさもおなじほだしにてなくもなほかへるや

まかな（巻三）

八四 我ばかりおもひこがれてとしふやとむろのやしまのけぶりにも

とへ（巻一）

八六 けふやさはかけはなれぬるゆふだすきなどその神にわかれざり

けむ（巻二）

恋部立の最初と最後に、源氏の宮関連歌が配されているのは、恋部立に源氏の宮関連歌が多いから、確率的にそうなる可能性が高いだけとは、考え難いだろう。

配列上、番との考慮があるにしろ、恋部立に関連歌が他と比較して明らかに多く、恋部立の最初と最後に関連歌が配されているというこ

とは事実である。定家が源氏の宮関連歌を恋部立に相応しいと考える何かが、源氏の宮関連歌にあったと言えるのではないだろうか。

### 三

源氏の宮は、物語の最初から狭衣に思われている唯一の女性であり、『狭衣物語』は物語を通して、狭衣の源氏の宮思慕を描いている。源氏の宮の場面の物語と、撰入歌の場面の引用を見れば分かるが、他の女君は概ね関連歌が集まりやすい場面や巻があるのに対し、源氏の宮の場面は物語を通じて存在している。物語を通じて歌が撰ばれていることは、『資料三』にある歌が撰出された巻数のばらつきからも、看取できる。斎院になって以降の巻三・四は、気軽に会いにいけないため、巻一・二に比べて歌数が減っているが、そこまで気にするほどのことではないだろう。それよりも歌の変化を見ていくと、巻一・二にはない贈答を成立させた歌が、巻三・四にはあることが分かる。こちらの方が、歌が若干減っているということよりも、重要であろう。

源氏の宮との場面での歌は、狭衣が独り思い悩み独詠歌し、一方に不成立贈答歌で訴える、というものがほとんどである。物語を通して、このパターンは源氏の宮の場面で繰り返されている。狭衣が帝に即位してしまつと、さすがの源氏の宮も狭衣の贈答を、今までのように無視できないので、歌を返すようになる。巻三・四に贈答を成立させた歌があるのは、そういった事情が大きく影響していると思われる。だ

が、狭衣の詠む歌は源氏の宮を恋しく思っているのに対して、源氏の宮の詠む歌というのは形ばかりのものなのである。狭衣と源氏の宮の歌の遣り取りの内実を、次の場面を例に挙げて見ていく。

あさましき心の中の、かけかけしき方ざまをば、今はいかなりとも、思し寄るべきならねど、水の白波なる御ありさまを、雲のよそにのみ思ひやりきこえさせたまはんには、長らへぬべからん命のほどなりとも、いかがと、思し續けて、月の顔をのみ眺めさせたまへり。

めぐりあはん限りだになき別れかな空行く月の果てを知らねば（恋部立二番歌）（注）

とて、押し当てたまへる袖のけしき、限りある世の命ならぬには、げに、さ思しめさるらん。あまりまばゆければ、御几帳ひき寄せさせたまひて、やをら入らせたまふ紛らはしに、

月だにもよその村雲へだてずは夜な夜な袖にうつしても見ん

（別部立九二番歌）

と、なほざりに言ひ捨てさせたまふ、慰めばかりも、げに、なかなか思ひ離れぬ絆ともなりぬべし。

『狭衣物語』巻四・二一三四七頁

即位が決まり今まで以上に会い難くなる辛さを詠んだ狭衣歌に対し、源氏の宮の返歌は、義理立てした形ばかりのものとなっている。つまり、贈答の関係を成立させていても、中身はすれ違ったものという、本質の伴わない形ばかりの贈答なのである。そして引用場面の贈答を、

定家は『物語二百番歌合』で、狭衣詠歌を恋部立の最初に配列し、返歌の源氏の宮詠歌を別部立に配列している。このことより、狭衣詠の一途さや、源氏の宮詠のそっけないような様子を、配列する部立を異にすることで、定家は示したのではないかと思われる。

話を元に戻すが、源氏の宮の場面というのは、そもそも物語を通じてあり、『物語二百番歌合』撰入歌がある場面も、物語を通じて存在している。もっと細かく見ていくと、狭衣と源氏の宮との関係は変わらないが、狭衣と源氏の宮の置かれている立場は変っていく物語中で、何らかの転機となる場面には必ず歌が存在しており、定家はそういったところから、歌を必ずと言っていいほど撰入している。例えば、

いかにせむいはぬいろなる花なれば心のうちをしる人もなし（恋部立三三番歌）

は、物語最初の歌であり、狭衣が源氏の宮を慕っていることを読者に知らせる独詠で、源氏の宮との物語を展開していく最初のきっかけの場面となっている。

神やまのしひしばがくれしのべばぞゆふをまかくるかもの水がき

（恋部立六〇番歌）

は、源氏の宮に託宣が下り齋院になることが決まった直後、辛い胸の内を狭衣が源氏の宮に訴える場面、つまり新しい場面へと展開していく場面となっている。これらが、転機場面の用例に挙げられる。

また『狭衣物語』には、狭衣の源氏の宮思慕を象徴する「室の八鳥」という言葉があり、その言葉を使った歌も定家は恋部立八四番に撰入

している。

我ばかりおもひこがれてとしふやとむろのやしまのけぶりにもと

へ（恋部立八四番歌）

は、今まで秘めていた恋心を源氏の宮に初めて訴えたもので、この告白の場面以降、狭衣は他の人には気づかれないようにしながら、幾度も源氏の宮に恋情を訴えていくこととなる。この場面の歌も物語において、兄と妹という関係に過ぎなかった狭衣と源氏の宮の関係を、一方的に恋情を訴え訴えられる関係といった、物語の核を担う関係を決定付ける転機となる場面の歌と言える。

狭衣は独り思い悩み独詠し、気持ちを抑えられなくなると、源氏の宮に不成立贈答歌で訴える。先述したように、狭衣と源氏の宮の場面の歌が、ほぼこのパターンの繰り返しなのは確実である。しかし、ただ繰り返し返すのみなら単調なだけだが、転機場面として挙げたところにあるように、狭衣と源氏の宮の立場は刻々と変化し、二人の距離は広がっていくので、同じことの繰り返しといっても、ニュアンスが微妙に異なった繰り返しと言える。

この繰り返しと転機場面の歌が『物語二百番歌合』に採られていることを考えると、源氏の宮関連挿入歌を見ていけば、そこに『狭衣物語』における源氏の宮思慕の全貌が見えてくると言っても過言ではないだろう。

源氏の宮関連挿入歌が物語全四巻にわたって撰出されているということから、定家の『物語二百番歌合』源氏の宮関連歌の撰歌傾向は、

物語を通しての変化と、物語を通しての不変性、この二つにあるのではないかと考えられる。

変化を重要視していることは、狭衣と源氏の宮の関係の転機となる歌を、定家が撰入しているところから分かる。では物語を通じて不変なものとは考えると、繰り返しのパターンで表されると指摘した、狭衣の源氏の宮思慕であろう。では、狭衣の源氏の宮思慕は、互いの立場が変化する中で、思慕の色合いが変化したりはしなかったであろうか。

狭衣と源氏の宮の関係を考えていくと、兄妹のように育つが、実際はいとこ同士であるから、二人の結婚は許されないわけではない。なのに狭衣は、

ただ双葉よりつゆの隔てもなく生ひ立ちたまへるに、親たちを始めたてまつり、よそ人も、帝、東宮なども、一つ妹背と思おきてたまへるに、我は我と、かかる心の付き初めて、思ひわび、ほのめかしたまふもかひなきものゆゑ、あはれに思ひかはしたまへるに、思はずなる心ありけると、思し疎まれこそせめ、世の人の聞き思はんことも、むげに思ひやりなく、うたであるべし、大殿、母宮なども、並びなき御心ざしと言ひながら、この御事はいかがせん、さらばさてあれかしとは、よに思さじ、：

（『狭衣物語』一・一九頁～二〇頁）

の部立分にあるように、親や世間の人が狭衣と源氏の宮を兄妹同然に思っているから、源氏の宮への思いは不謹慎なもので、愛情を注いで

くれている親も、源氏の宮との結婚は、許してくれないだろうと考えている。まったくの禁忌ではないのだから、心次第で先に進むことはできるだろうに、狭衣は自分で許されない恋だと思い、源氏の宮と自分の間に距離をおいているのである。

狭衣は、源氏の宮への思いを、禁忌であり叶わないものであると自分で定めており、辛いと嘆いたり、思いを受け入れてくれと訴えたりするが、最終的にはその前提に忠実に従っている。この前提が、狭衣と源氏の宮の間に心理的距離を置かせるため、堪えきれずに源氏の宮に思いを告げた後も、狭衣はその思いを隠そうとするし、源氏の宮に無理強いをすることもない。

それでは、源氏の宮が齋院になるなどといった、現実問題として源氏の宮への思いが叶わないという問題に直面した場合は、その前提や心理的距離がどうなるかと考えると、やはりそれらは依然として、狭衣の意識に根強く存在したと思われる。なぜそう考えられるかという点、狭衣の源氏の宮に対する思慕の形態に、大きな変化が見られないためである。あらずじと引用場面を見ていくと、源氏の宮が齋院になつてからも狭衣が帝位に就いた以降も、それ以前と同じく狭衣が悩み苦しんで独詠し、歌で恋情を訴えるという思慕の形態は変化していないのである。歌の内容も、叶わない恋に苦しみむところは一貫している。

確かに、現実問題として狭衣の源氏の宮思慕の障害は、物語が進むごとに増えていき、狭衣は自ら定めたものの上に、さらに押し掛かる

不幸に苦悩していく。だが、最初から禁忌であり叶わない思いだと思っているため、立場の変化という現実的な問題は、根本的な源氏の宮思慕にさして影響しなかったのではないかと思われる。

そう考えていくと、『狭衣物語』に描かれている狭衣の源氏の宮への思いは、不変の思慕であり、『物語二百番歌合』で定家は、変わり行く状況の中でも貫かれる、狭衣の不変の思慕に、重きを置いていたのではないかと考えられるのである。

#### 四

『物語二百番歌合』撰入の源氏の宮関連歌が、恋部立に最も多く配列されていることは、すでに冒頭で述べた。『物語二百番歌合』において恋部立というのは、一番始めの部立であり、もともと歌数が多い。その部立の半数近くが源氏の宮関連撰入歌であり、恋部立の最初と最後に源氏の宮関連歌が配列されているのは、とても意味あることである。定家が源氏の宮関連歌を多く恋部立に配したのは、狭衣の源氏の宮思慕に特に関心を抱いていたからであろう。先ほどの考察で、源氏の宮関連歌が『物語二百番歌合』に採られている場面から、狭衣の源氏の宮思慕の不変性というものを指摘した。だが狭衣の源氏の宮思慕には、それだけではなくまだ多くの意味があると思われる。狭衣は源氏の宮だけと恋をするわけではないのに、なぜ定家は源氏の宮関連歌を多く恋部立に配したのか。源氏の宮と他の女君とを比較することで、



その問題点を明らかにしていこう。

源氏の宮が他の女君と異なる点を列挙していくと、

一 兄弟同然の従兄弟というごく近い存在である点。

二 狭衣に好意をもたれながらも、唯一関係も持たず狭衣を拒絶し独身であり続けた点。

三 狭衣に深く関わった女君が狭衣との間に子を成し、狭衣との関係が切れないものとなる中、源氏の宮のみ狭衣の思慕だけで一方的な関係が続く点。

四 女君と狭衣の秘めた関係が明るみに出ることはないが、いずれの女君との関係も第三者に知られている中、源氏の宮への思いは第三者に知られることがないという点。

五 物語中で源氏の宮が自分という人間を表さないといい点。  
などが挙げられる。

作中に登場する女君は、それぞれ特徴的ではあるが、相違点を見ていくと、その中でも源氏の宮は殊更異質な存在と言えるのではないだろうか。他の女君が傷つき苦しむ中で、源氏の宮のみ、常に清らかで汚れない存在として描かれていることも、特異であろう。

物語の最初から、源氏の宮は狭衣の理想の女性であり、狭衣にとって身内という最も近いところにいる存在であるが、それと同時に最も手の届かない存在でもある。狭衣は源氏の宮の近くににいるが故に、源氏の宮のすばらしさを目の当たりにし、思いは募ってしまうが、身内でもあるし、何よりも狭衣が源氏の宮への思いを禁忌としているが

故に、思いを口にすることもできない。狭衣自身、結ばれるあてのないことは分かっていると、作中で何度も繰り返している。狭衣は、源氏の宮への恋は、初めから叶わぬものと見ており、それにも関わらず思い続ける。源氏の宮への思いを禁忌であり叶わないものとしているせいで、終わることのない苦悩に狭衣は身を置くことになる。

源氏の宮は他の女君と異なり、作中にはその心の動きを描いた描写はほとんど存在せず、あったとしても狭衣の恋情を煩わしく思っているということぐらいしか書かれていない。その上、数少ない源氏の宮詠の歌を見ても、狭衣を思つての歌はなく、わずかにある狭衣に対する返歌も、源氏の宮の内面を表したものは、いい難いものである。他の女君たちが詠む歌は、自分の苦しい心情を詠んだものであるのに、対し、源氏の宮の歌にそのような心情を詠んだものがないというのは、自己表現の希薄さ云々というよりも、そこが彼女の他の女君とは異なつた特徴なのだと考えられる。主体性がない、大げさに言うならば明確な実体をもたないような存在、つまり意思不在の存在であることが、源氏の宮の特徴なのである。

源氏の宮と狭衣の関係というのは、源氏の宮が狭衣の思慕の対象である、源氏の宮に知れた時点から、身内という枠を外れ、狭衣の一方的な思慕で成り立つ関係となっている。その中で源氏の宮は煩わしく思いながらも、狭衣を完全に拒絶することはない。それは、身内という関係を望む源氏の宮の、心の表れとも取れるかもしれないが、そう解釈できる要素が物語中にはないため、源氏の宮の曖昧な態度から、

そのような意思を読み取るのは不可能なことだろう。

狭衣が源氏の宮を变らず思い続けるためには、源氏の宮という存在は必要でも、源氏の宮の意思は必要ないと考えられる。現に源氏の宮の存在は、物語を通して狭衣の思慕の中にあり、物語の現実の中では、源氏の宮の存在というのは浮いたものとなっている。狭衣にとって永遠に恋し続けていける女性であるには、全てに秀でている狭衣に見合うだけの才を持ち、狭衣の思いが報われることなく、そして何よりも、狭衣が想い続けていられる存在でなくてはならない。その点、源氏の宮は全ての条件を満たした存在である。狭衣にとって、源氏の宮は独り思い続ける相手であり、その源氏の宮の存在が狭衣の思いの中以外では、希薄であるということを考えると、源氏の宮への恋というよりも、源氏の宮を思い続けるということ自体が、狭衣にとっての恋であり、叶う叶わないは問題にもならないほどなのだ、と言えるだろう。だからこそ、源氏の宮への思いに独り悩み苦しむ独詠歌や、行き場のない思いを訴える不成立贈答歌に狭衣の恋は強く現れたと考えられる。

以上のことから、『物語二百番歌合』恋部立て定家が物語全四巻にわたって、源氏の宮関連の歌を選んでいった理由は、狭衣が一途に一人の女性を思い続けるという恋の不変性にあり、思い続けられるのは、相手の意思不在によるところが大きいことが分かった。相手の意思が不在であるため、思う側は独りで悩み苦しんでいかなければならない。その狭衣の苦悩を歌い込めた独詠歌や不成立贈答歌が『物語二百番歌合』恋部立に多く撰入されているのは、相手を思うことではいつそう内

面にこもっていく狭衣の恋に定家が注目していたからにはかなるまい。

定家はあてのない恋をこそ恋と見る傾向があり、源氏の宮関連歌はその点で、定家の恋の思想と通ずるものがあるのではないだろうか。

こぬ人をつきせぬ浪に松浦舟よるとは月のかげをのみ見て（一七  
七六・寄舟戀）（注4）

こぬ人を松帆の浦のゆふなぎにやくや藻塩の身もこがれつ、（二  
四四七・戀）（注4）

定家詠歌には右に挙げた二首の他にも、あてのない恋を詠んだ歌は少なくなく、そこに狭衣物語歌の影響があるように思われるが、『狭衣物語』に描かれている恋が定家の趣向に合ったという考え方もできる。ここで挙げた歌が『狭衣物語』を意識しているとするのは軽率であろう。

相手が存在しながらも、不在であるように恋をしていくということろに、『物語二百番歌合』恋部立・源氏の宮関連歌の特徴があるというのは、『狭衣物語』を論じていく上でも、意味のあることであろう。

## 五

狭衣の源氏の宮思慕の形が見えてきたところで、狭衣が何故そのような恋を撰ばなければならなかったのかという問題を、考えていきたいと思う。ここでは狭衣詠歌が『物語二百番歌合』には多いため、狭衣の人となりについて考えることから、考察を進めていく。

狭衣は姿形も美しく、才芸も秀でている、振る舞いも素晴らしい人間であると作中で述べられている。

光り輝きたまふ御容貌をばさるものにて、心ばへ、まことしき御才などは、高麗、唐にも類なきまでにぞ、人思ひきこえためる。〔中略〕よろづめでたく、めづらしき御ありさまなり。かくのみ世の中に言ひめでられたまふを、大殿、母宮、いとあまりゆゆしく、危ふきものに思ひきこえさせたまへり。

〔狭衣物語〕一・二六頁―二七頁

狭衣の容姿・才芸・行為があまりに超越しているため、逆に両親は狭衣を心配するほどである。狭衣は両親に溺愛されており、その様子も作中に記されている。

あまたものせさせたまはんにてだに、この御ありさまをば、親たちも、いかでかは優れて思さざらん、と見えたまふ。この頃、御年廿に、二三足りたまはで、二位中将とぞ聞こえさすめる。なべての人も、かばかりにては、中納言にもなりたまふめるを。されど、この御ありさまの、この世の人とも見えたまはず、いとゆゆしきに、御位をだにあまりまだしきにと、稚児のやうに、思ひきこえさせたまひたるなるべし。母宮などは天人などのしばし天降りたまひたるにやと、恐ろしう、かりそめにのみ思ひきこえさせたまひて、御交じらひなども後ろめたく思ひきこえさせたまひたれど、さのみはいかでかはとて交じらひたまふ、出で入りに目を付けて心を添へきこえたまへるさまなど、御心の暇なげなり。雨

風荒きにも、月の光のさやかなるにも、当りたまふをば、いまいましくもゆゆしく思ひきこえさせたまへるを、大人びたまふままにはあまり苦しう、憂きは頼まれぬべき心地のみし、思さるる折々もあるべし。

〔狭衣物語〕一・二三頁―二三頁

すべてに秀でている主人公というのは、物語によく見られる設定であるが、そこに脆弱な感じが含まれている人物像は、そう多くないように思われる。では、他に狭衣特有の設定というものはないか、〔狭衣物語〕自体に〔源氏物語〕の影響がある（注）のは周知の事実であり、狭衣という人物を見る際、光源氏や薫を引き合いに出して考察することは逃れられないだろう。〔狭衣物語〕の作中にはつきりと、光源氏や薫らの名は登場している。

池の汀の八重山吹は、井出のわたりにやと見えたり。光源氏、身も投げつべし、とのたまひけんも、かくやなど、独り見たまふも飽かねば、侍童の小さきして、一房づつ折らせたまひて、源氏の宮の御方へ持て参りたまへれば、…

〔狭衣物語〕一・一七頁

隠れなき御単衣に透きたまへるうつくしさ、いとかからぬ人しもこそ多かれと、なほいかで心あらん人の、ただうち見放ちたてまつるやうはあらん、ましてかばかり御心にしみたまへる人は、見たてまつりたまへることに、胸つぶつぶと鳴りつつ、うつし心もなきやうにおぼえたまふを、よくぞ忍びたまひける。源氏の女一

の宮も、いとかくばかりえこそおはせざりければや、薫大将のさしも心留めざりけん、とぞ思さるる。

『狭衣物語』一・五七頁～五八頁

では、狭衣と光源氏・薫の人物設定上の相違はいかなる点にあるのか。才・容貌共に優れているのは三者とも変わりなく、ある女性を思い続けるという点も共通している。しかし光源氏・薫がその生い立ちに片親の不在という不幸を背負っているのに、狭衣にはその生い立ちにまつわる不幸というのではなく、先に用例を挙げて示したが、両親に溺愛されて育ってきているのである。

狭衣は生い立ちも申し分ないし、才能も十分で、生きていくに何の不都合もない。それなのに、狭衣は物語の当初から厭世観を持ち合わせているのである。物語が進むと、厭世観に女君との関わりや、世間の生き難さが含まれてくるが、当初の厭世観が何に起因するものかは知れない。同じく物語の当初からある源氏の宮思慕も、どういう経緯で狭衣が思うようになったかは描かれていない。

狭衣の苦悩の中で、厭世観と源氏の宮思慕が物語の当初から混在しているのは、それらが密接な関係にあるためではないだろうか。まず源氏の宮思慕があり、その思慕の苦しさから厭世観が出てくるという考えは適当ではなからう。先にも述べたが、源氏の宮への思いを禁忌と定めているのは、世間ではなく狭衣だからである。自ら生き難い選択をし、世を憐むというのもあるかもしれないが、源氏の宮への思慕によって、狭衣の厭世観が形成されているとは到底思えない。ならば

その逆、厭世観から源氏の宮思慕が発生したというのは、どうであろう。世を厭う心を紛らわすために、源氏の宮思慕があると考えたと、厭世の思いが昇華されるあてもないから、源氏の宮への思いを禁忌としてあてのないものとしたと、考えることができる。どちらかという、後者の方が今までの考察の流れを思うと、順当に思われる。

狭衣の厭世の思いがどこから来たものであるかは、作品内に明らかに記されてはいなくとも、大方の予測はつこう。

生い立ちにしろ、容貌・才覚にしろ、それらがすべて優れている狭衣にとっては、人生に影を落とすものはない。だとしたら、両親がそう考えているように、すべて満たされているから、欠けることを畏れ不吉と思ひ、厭世観を募らせているとも考えられる。その厭世の思いが、源氏の宮思慕に続くとすれば、源氏の宮思慕は狭衣の畏れを緩和し、狭衣を現世に留めるものでなくてはならないだろう。源氏の宮思慕はそのような役割を担ってはいない。この論理の展開には、澁みがある。

そうなると思ふの視点を換え、厭世観と源氏の宮思慕はほぼ同じ次元の問題であり、二つは同じ処から発生したと考えるのは、どうであろう。

狭衣は満たされていないが、空虚さや侘しさを感じていだろう。精神の次元での空虚さは、生活の次元でいくら満たされていようと、埋めようがない。精神の次元での空虚さ侘しさから、世を厭ひ、空虚さを埋めるかのようにあてのない恋を追求めたのだと考ええると、す

べて辻褄があう。

源氏の宮が意思不在の存在であること、狭衣が源氏の宮への思いを禁忌とされていること、狭衣と源氏の宮との関係が完全な秘め事であること、これら全ては、狭衣の源氏の宮への恋が精神の次元での恋であるから、作中に表れるのである。精神の次元での恋の前に、空虚さ侘しさがああり、それは埋めようのない孤独であるからこそ、その恋は叶うことがあつてはならない。厭世の思いも、この世に孤独を埋めるものがないからこそ、物語の最初から最後まで狭衣に付きまとうのである。

この見解を裏付けるものとして、洞院の今姫君の物語が挙げられる。洞院の今姫君の場面からの『物語二百番歌合』撰入歌はなく、定家にはあまり重用されていない物語であるが、彼女の役割は狭衣の生きる次元との対比にあるだろう。

洞院の今姫君の物語を簡単に説明しておく。洞院の今姫君は狭衣の恋愛対象ではなく、幼稚で、何かにつけて拙い女君で、彼女の母代も仕える女房たちも全員思慮浅く、気品もない。狭衣はそんな彼女たちを目にするたび、毎回呆れてしまい、あまり関わり合いたくないと思う。狭衣と洞院の今姫君の関係は、入内の後見人を求められる側と求める側というそれだけの関係となっている。入内の後見を頼まれている狭衣が、あまりにも洞院の今姫君が幼稚なので、入内の後見に難色を示している間に、問題が起こり彼女の入内は立ち消えることとなる。立ち消えの原因は結局のところ母代の思慮の浅さが問題なのだが、母

代の劍幕に姫君はおびえて先走り、軽率にも自分で髪を落としてしまう。それでも、入内の話が立ち消えとなった事件のときに、通つていた男君と結婚しそれなりに幸せになる。

他の姫君たちの物語に比べ、洞院の今姫君の物語は高尚なものとは言い難く、道化じみており、その俗っぽさが物語において、唯一笑えるような場面と言えよう。洞院の今姫君の場面で詠まれている歌は、詠まれている悩みも幼稚で、和歌の技巧も稚拙なものとなっている。狭衣の生きている処と、彼女の生きている処のギャップが笑いを誘うのだろう。一見すると、洞院の今姫君の場面は複雑な悩みが多い『狭衣物語』で、小休止のように扱われているようにも見えるが、狭衣の生きている処と洞院の今姫君の生きている処の対比に、彼女の物語の意義はあるように思われる。洞院の今姫君の場面で描かれている苦悩は、すべて生活の次元の苦悩であり、厭世の思いや誰かを思つての苦悩などは描かれていない。洞院の今姫君は入内こそ叶わなかったが、結婚し幸せに過ぎしていると作中に書かれている。狭衣や他の姫君と比較して見れば、愚かな人物であっても、それなりに幸せを掴み取つたということだろう。そこには、狭衣が得たくても得られなかった世俗の穏やかさが書かれている。

俗っぽい物語であるが、穏やかな結末を迎える洞院の今姫君が生きている世界は、決して高尚なものではない。それに対し、安らぎを得られなかった狭衣の生きている世界は、明らかに高尚なものと言える。洞院の今姫君の苦悩は精神の次元のものではなく、狭衣の苦悩は精神

の次元ものであると、対比的に描かれているように思われるのである。

以上、洞院の今姫君を引き合いに、狭衣が持つ苦悩の精神性の高さを明らかにした。狭衣の源氏の宮への恋が、精神の次元での恋というのならば、『物語二百番歌合』で定家が源氏の宮関連歌を恋部に多く配した理由もそこにあると結び付けられるだろう。

狭衣の源氏の宮思慕を恋部に多く配したのは、定家が精神性の高い恋に、趣を感じたからではなからうか。これは個人的な見解であるが、狭衣の源氏の宮思慕の中で詠まれた歌に、定家は恋の思想のようなものを感じていたように思われる。

注1 『狭衣物語』には唱和と見られるものがない。つまり、一人が複数の相手を想定して詠んだ歌がないという特徴がある。なので、今回は唱和や屏風歌などをも含めた定義付けはせず、物語作品という枠においてはという前提条件のもとで、詠者が歌を詠んだ時点で、その歌を相手に伝える意思が詠者にあるかないかを問題にし、意志がない場合は、それを独詠歌とする事とする。日記や手習いといった類のものも、それが個人的に詠まれたものである以上は、たとえ人に伝わったとしても、独詠歌とするということである。例えば次のような場面、

宮つくづくと思し出づること多かる中に、この「末越す風のけしきは、過ぎにしその頃もかやうにやと、少し御目留らぬにしもあらで、筆のついでのですさみに、この御文の片端に、

夢かよ見しにも似たるつらさかな憂きは例もあらじと

思ふに

「起き臥しわぶる」などあるかたはらに、

下萩の露消えわびし夜な夜なも訪ふべきものと侍たれや  
はせし

身にしてみても秋は知りなき萩原や末越す風の音ならねども  
など、同じ上に書きけがさせたまひて、細やかに破りて、典侍の参りたるに、「捨てよ」とて賜はせたるを、隠れに持てゆきて見れば、物書かせたまひたりけると見るに、うしろめたきやうにはありとも、いとほしくのたまひつるに、これを面隠しにせんと思ひとりて、「かかる物をなん、思ひがけぬ所にて見つけて侍りつるを、参らするはおぼろけのには侍らず。いまは思しめし慰めよ」など聞こえたり。

『狭衣物語』一・一〇〇頁～一〇一頁  
これは、女二の宮が文の端に書きつけた歌を狭衣に渡す気がないために、捨てるように典侍に言ったが、狭衣から必ず返事を貰ってくるように言われた典侍は、自分の面目を立てるため、女二の宮の歌を女二の宮の意志に関係なく狭衣に伝えてしまったものである。このように伝える意思がなく詠まれた歌であっても、詠者の意志に関係なく伝えられてしまい、結果として贈答歌の形になってしまふ歌の存在が印象深いのも、『狭衣物語』の特徴であり、このような事情を持った歌の扱いが難しい。だがこれも、今



回は先に挙げた定義に従って分類していくので、歌を詠んだときに詠者に伝える意志がないために、独詠歌とすることとなる。

## 注2

『狭衣物語』には贈答が成立しない歌や、独詠歌に対し返歌を詠んだものが目立つという特徴がある。例えば、次の場面の歌などがそれにあたる。

「いはけなくものせさせたまひしより、心ざしことに思ひきこえさせて、こちらの年月積りぬるは、あまり知らせたまはざらんも誰も後の世までうしろめたうもなりぬべければ、いとかう世に知らぬ物思ふ人もありけりとばかりを、心得させたまへかし」とてなん。

かくばかり思ひ焦がれて年経やと室の八島の煙にも問へまことに堰きかねたまへるけしきのわりなきを、宮はあさましう、恐ろしき夢におそはるる心地せさせたまへば、〔中略〕恐ろしうわびし、と思したるより外事なきに、人近く参れば、絵に紛らはして少し居退きたまふ。顔のけしきもいかがと思せば、立ち退きたまひぬ。

## 『狭衣物語』一・六〇頁～六一頁

この場面は、狭衣が源氏の宮に恋情を訴えたにも関わらず、源氏の宮はそれを全くとりあわないというものである。このような、一方的に詠みかけるといふ独詠歌じみた贈答歌は、作中に全部で四十五首ある。このような相手に詠みかけたものであっても、そ

の歌に対し相手が応えない場合の歌を、不成立贈答歌として扱っている。

## 注3 歌の後の、（ ）内に書かれている歌番号は、『物語二百番歌合』

のものである。

## 注4 歌の後に（ ）書きで歌番号を示しているものは、久保田淳

『訳注 藤原定家全歌集』からの出典であることを表す。

## 注5 後藤康文「もうひとりの薫——『狭衣物語』試論——」（王朝物語

研究会編『研究講座 狭衣物語の視界』平成六年四月 新典社

久下晴康『平安後期物語の研究 狭衣浜松』（昭和五十九年十二

月 新典社）

土岐武治『狭衣物語の研究』（昭和五十七年三月 風間書房）

## 【使用テキスト】

『新編国歌大観』編集委員会 『新編国歌大観』 一九八三年二月、

一九九二年四月 角川書店

小町谷照彦・後藤祥子 新編日本古典文学全集二九『狭衣物語』

一・二 一九九九年十一月～二〇〇一年十一月 小学館

久保田淳 『訳注 藤原定家全歌集』上・下巻 昭和六十年三月、

六月 河出書房

（えぐさ みゆき／平成十七年度博士前期課程修了）